

# オセアニア[豪州]

## 1 農・畜産業の概況

豪州の農業は、実質国内総生産（GDP）の2.1%、就業人口で2.5%と、産業全体に占める割合は必ずしも高くない（2011/12年度（7月～翌6月））。しかし、同年度の全輸出額に占める割合で見ると、農業は11.5%となっており、輸出産業の中で重要な位置を占めている。

豪州では、国土面積（7億7000万ヘクタール）の53.2%に相当する4億970万ヘクタールが農業に利用されているが、その大半が牛や羊の放牧地となる自然草地および採草地であり、小麦や他作物を栽培する耕地面積は、2470万ヘクタールにすぎない（2012年6月末現在）。

豪州の農場数は、2010/11年度は13万5447戸（前年度比0.9%増）と、比較的良好な気象条件や、牛肉・小麦の輸出価格の上昇などから、前年度をわずかに上回ったものの、農家の高齢化による離農などにより、おおむね減少傾向で推移している（表1）。

表1 農場数などの推移

区分/年度	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12
農場数	150,403	140,704	135,996	134,184	135,447	-
農業従事者	350.4	354.0	362.4	369.2	351.4	334.9
1農場当りの農業粗所得	29,800	64,220	78,980	59,470	120,870	109,200

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2012」、  
「Australian Farm Survey Results」

注1：農場数、農業従事者数は各年6月末時点

注2：農場施設評価額2万2500豪ドル以上の農場

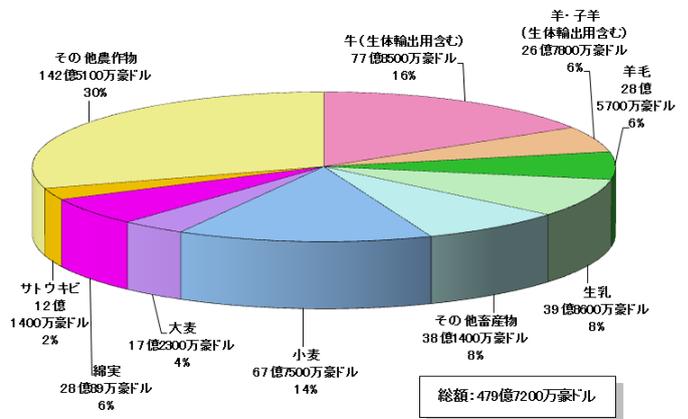
注3：2011/12年度は暫定値、なお農場数のデータは公表されていない

経営形態では、肉牛、羊、酪農などの専業経営のみならず穀物などとの複合経営も多いことから、農業従事者全体の約8割が、何らかの形で畜産経営に携わっているとみられる。

農業粗生産額は、2000年以降、干ばつの影響により2002/03年度および2006/07年度は減少したものの、おおむね増加傾向で推移している。2011/12年度は、綿実の増産や堅調な羊毛価格を反映して、479億7200万豪ドル（同2.3%増）となった（図1）。

内訳では、畜産物が211億2000万豪ドル（同0.4%増）、穀物など農作物が268億5200万豪ドル（同3.8%増）と、ともに前年度を上回った。畜産物のうち、牛（生体輸出用を含む）は77億8500万豪ドル（同0.5%減）、生乳は39億8600万豪ドル（同1.4%増）となった。

図1 農業粗生産額(2011/12年度)



資料：ABARES「Agricultural Commodities」

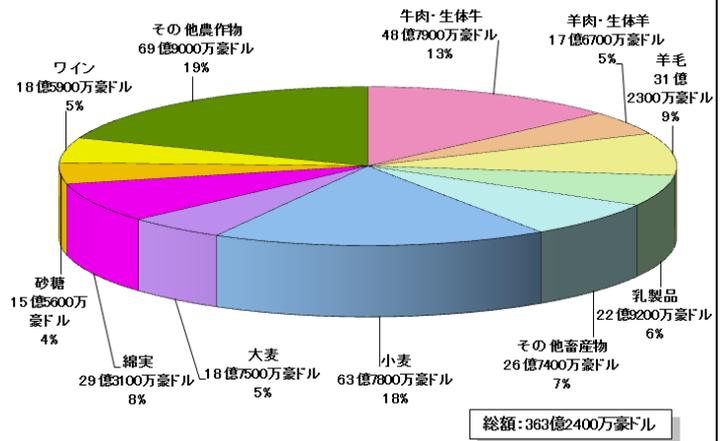
注1：年度は7月～翌6月

注2：ABARESによる推計

2011/12年度の農産物総輸出額（FOB）についても、363億2400万豪ドル（同14.2%増）と、かなり大きく増加した。

このうち、畜産物輸出額は、147億3500万豪ドル（同1.6%増）となった。内訳は、牛肉・生体牛が48億7900万豪ドル（同1.1%増）、羊肉・生体羊が17億6700万豪ドル（同0.6%減）、羊毛が31億2300万豪ドル（同2.5%増）、牛乳・乳製品が22億9200万豪ドル（同2.3%減）となった（図2）。

図2 農産物総輸出額(2011/12年度)



資料：ABARES「Agricultural Commodities」  
注：年度は7月～翌6月

## 2 畜産の動向

### (1) 酪農・乳業

豪州の酪農は、放牧を主体とする経営が大部分であり、気候条件に恵まれ、牧草の生育が良いビクトリア（VIC）州を中心に行われてきた。ただ、最近では、度重なる干ばつを経て、穀物や乾草などの購入飼料の利用も多くなっている。

また、生産される生乳の約7割が加工向けであり、さらに、製造される乳製品の約4割が輸出向けという、輸出を重視した産業である。

そのため、生乳生産は、天候や牧草の生育状況などによって大きく変動するとともに、酪農経営は、乳製品の国際市況および為替変動の影響を受けやすいという特徴がある。

#### ① 主要な政策

豪州では、かつて、加工原料乳に対する価格補てん政策（連邦制度）と、飲用向け生乳に対する最低価格保証政策（各州の制度）を実施していたが、2000年7

月1日に両制度が撤廃となり、生乳の販売・流通は完全に自由化された。また、2003年7月には酪農関係機関の再編が行われ、豪州酪農庁（ADC）とほかの研究機関が統合し、新たにデイリー・オーストラリア（DA）が発足した。DAでは、販売促進や研究開発、マーケット情報の提供などを一括して行っている。

なお、これらの事業財源の多くは、生乳の販売時に課される生産者課徴金によるものである。

#### ② 生乳の生産動向

乳用経産牛の飼養頭数は、ピークであった2001年の218万頭から、2007年、2008年の度重なる干ばつを経て、減少傾向で推移した。2012年6月末の乳用経産牛飼養頭数は、干ばつ発生前の2006年6月時点と比べ13.3%減の163万頭となった（表2）。また、酪農家戸数も長期的に減少傾向にあり、同23.5%減の6,770戸となった。一方、1戸当たりの経産牛飼養頭数は、大規模で効率的な農家への集約という長期的な傾向から、同4.3%増の241頭となっている（図3）。

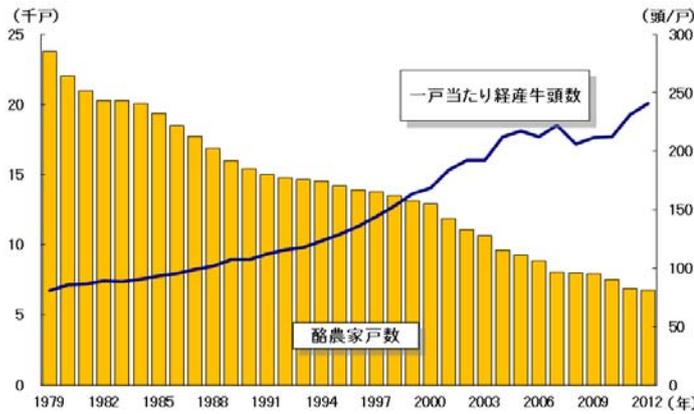
表2 乳牛飼養頭数等の推移

(単位:千頭、戸、頭)

区分/年	2008	2009	2010	2011	2012
乳牛飼養頭数	2,537	2,612	2,542	2,603	
経産牛飼養頭数	1,641	1,676	1,596	1,589	1,630
酪農家戸数	7,953	7,924	7,511	6,883	6,770
一戸当たり経産牛頭数	206	212	212	231	241

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2012」、  
Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」  
注：各年6月末時点

図3 酪農家戸数と一戸当たり経産牛頭数の推移

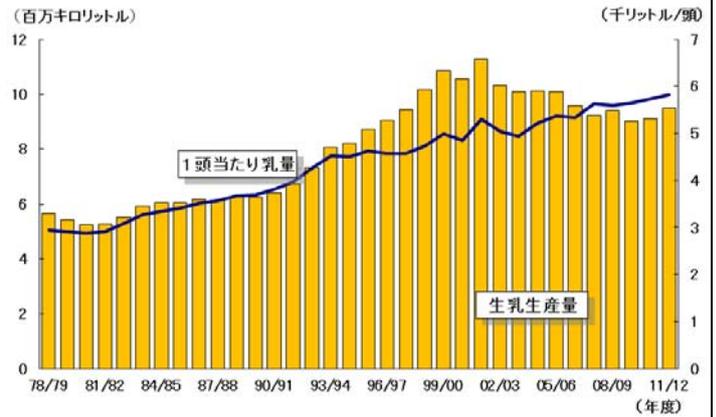


資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

生乳生産量は、1990年から2000年代初頭までは、ガット・ウルグアイラウンド合意に伴う乳製品輸出拡大への期待などを背景に、増加傾向で推移してきた。しかしながら、2002/03年度以降は、干ばつなどの影響により減少傾向で推移した。2009/10年度以降は回復傾向となり、2011/12年度は、良好な気象状況や、かんがい地域での水利用環境の回復から、948万キロリットル（前年度比4.2%増）と、やや増加した。

経産牛1頭当たり乳量については、放牧に適した品種へと改良が進められたこともあり、日本や米国などと比較してそれほど多くない。しかし、最近では、乳牛の遺伝子研究や、補助飼料供給体制の進展により着実に増加し、2011/12年度は、過去最高の5,950リットルとなった（図4）。

図4 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量の推移



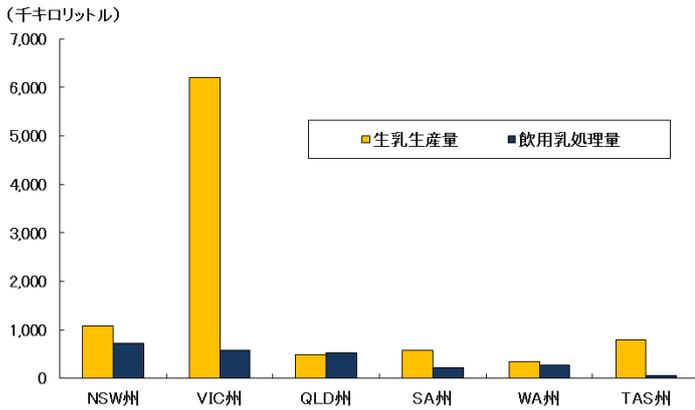
資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2012」  
注：年度は7月～翌6月

加工用に仕向けられる生乳の割合は、乳製品の輸出拡大に伴って徐々に上昇し、2004/05年度には生乳生産量の8割程度を占めた。しかし、最近では国内の飲用乳需要が堅調であることなどから、2011/12年度の加工向け割合は、74.8%と低下している。

生乳生産量を州別に見ると、VIC州が全体の65.5%を占め、豪州最大の酪農地域となっている。一方、飲用乳の処理量は、シドニーなど大消費地を擁するニューサウスウェールズ（NSW）州が最も多く、次にVIC州、クイーンズランド（QLD）州となっている（図5）。

このように、生乳生産に占める飲用向けの割合が州により大きく異なるため、乳業メーカーごとの生産者乳価については、飲用向け割合が高い地域とそれ以外の地域とでは、大きな差が生じている。

図5 州別生乳生産量(2011/12年度)



資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」  
注：年度は7月～翌6月

③ 牛乳・乳製品の需給動向

主要乳製品の生産量は、品目ごとに傾向が異なる。2011/12年度は、生乳生産の増加を背景に、バターが10万600トン（前年度比4.5%増）、チーズが34万300トン（同0.5%増）、脱脂粉乳が23万300トン（同3.5%増）と、いずれも前年度を上回った。一方、バターオイルは、バター生産増加を背景に、1万9200トン（同26.7%減）、輸出仕向けの割合が最も多い全粉乳は、国際相場が軟調に推移したことから、14万400トン（同7.2%減）と、ともに前年度を下回った（表3）。

表3 牛乳・乳製品生産量の推移

(単位:千キロリットル、千トン)

区分/年度	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12
生乳	9,223	9,388	9,023	9,100	9,480
飲用向け	2,188	2,229	2,269	2,316	2,389
加工向け	7,035	7,159	6,754	6,784	7,091
バター	99.2	109.8	100.1	96.3	100.6
バターオイル	28.4	38.7	28.2	26.2	19.2
チーズ	360.9	342.3	349.3	338.6	340.3
脱脂粉乳	164.3	212.0	190.2	222.5	230.3
全粉乳	142.0	147.5	126.0	151.3	140.4

資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」  
注1：年度は7月～翌6月  
注2：脱脂粉乳にはバターミルクパウダーを含む

2011/12年度の主要乳製品の輸出量は、前年度をわずかに上回ったバターを除き、軟調な国際相場を背景に、いずれも前年度を下回った。

2011/12年度の乳製品生産量に占める輸出割合は、全粉乳は82.7%、脱脂粉乳は61.4%と、生産量の過半を占めている。また、バター（バターオイルを含む）、チーズについても、それぞれ40.7%、47.3%と、過半に迫るシェアとなっている（表4）。

乳製品の輸出先は、日本、東南アジアを含めたアジア地域向けの割合が高く、輸出額ベースで全体の73.7%と、圧倒的なシェアを占めた（図6）。特に粉乳類は、還元乳などの需要が多い東南アジア諸国向けを中心に、脱脂粉乳については約8割、全粉乳については約6割がアジア地域向けに輸出されている。

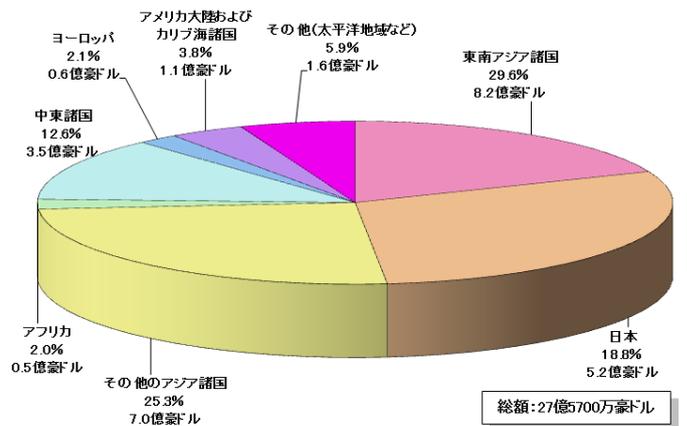
表4 主要乳製品輸出量の推移

(単位:千トン)

区分/年度	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	輸出割合 (2011/12)
バター	34.6	44.0	41.7	33.4	33.8	40.7%
バターオイル	22.5	26.5	32.0	22.4	15.0	
チーズ	202.4	144.7	168.1	163.0	161.0	47.3%
脱脂粉乳	119.8	162.1	125.6	155.3	141.4	61.4%
全粉乳	125.1	158.0	116.7	125.9	116.1	82.7%
飲用乳	59.9	59.9	64.2	70.9	87.9	3.7%

資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」  
注：年度は7月～翌6月

図6 地域別乳製品輸出額(2011/12年度)



資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

飲用乳の1人当たり消費量は、カフェ文化の浸透により、牛乳の間接消費を通じて高い水準にあり、2011/12年度は、106.2リットル（前年度比1.7%増）となった。チーズは、ハードタイプからソフトタイプへのシフトを伴いつつ、一定の水準を維持しているものの、同2.2%減の13.4キログラムとなった。バターは、風味の良さ、料理における使い勝手の良さから、一定の水準を維持しており、前年並みの3.9キログラムとなった。ヨーグルトは、健康志向を反映して、同2.7%増の7.5キログラムとなった。

表5 1人当たり乳製品消費量の推移

(単位:キログラム/人・年)

区分/年度	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12
飲用乳	103.0	102.6	102.4	104.4	106.2
チーズ	12.5	12.9	13.1	13.7	13.4
バター	4.1	4.0	3.8	3.9	3.9
ヨーグルト	6.9	6.7	7.1	7.3	7.5

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注: 年度は7月～翌6月

#### ④ 乳価の動向

生産者乳価は、2004/05年度から2006/07年度は、1リットル当たり30豪セント前半で推移していた。しかし、2007/08年度は、国際的な乳製品価格の高騰を反映して、同49.6豪セントと過去最高となった(表6)。その後、世界金融危機(2008年9月)以降の経済低迷、比較的高値で推移した豪ドルの影響から、2年連続で下落した。2010/11年度は、乳製品の国際価格が堅調であったため上昇したものの、2011/12年度は、年度当初の乳製品主要輸出国の生乳生産が好調であったことから、乳製品の国際相場が軟調に推移したため、前年度比2.8%安の同42.0豪セントとなった。

表6 生産者乳価の推移

(単位:豪セント/リットル)

年度	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12
生産者乳価	49.6	42.4	37.3	43.2	42.0

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注: 年度は7月～翌6月

#### (2) 肉用牛・牛肉産業

豪州の肉用牛生産は、酪農と同様、牧草(放牧)に依存しており、牛肉生産量の6割以上を輸出に仕向ける輸出依存型産業である。

肉用牛は、乳牛に比べると粗放的な飼養管理が可能であり、また、利用可能な草地の範囲が広いことに加え、熱帯・乾燥地域などの自然条件が厳しいところでも、これに適応する熱帯品種などを選択的に導入することによって飼養が可能となることから、内陸部の極端な乾燥地帯を除き、ほぼ豪州全土で、多種多様な品種による生産が行われている。

#### ① 主要な政策

肉用牛や牛肉の需給管理を目的とした制度・政策は特になく、生産者は、国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。また、豪州家畜検疫検査局(AQIS)などの政府機関が家畜衛生政策を、豪州食肉家畜生産者事業団(MLA)などの業界団体が販売促進、研究開発、市場情報の提供などを行っているが、これらの事業財源の多くは、生体の取引(販売)時に課される生産者課徴金によるものである。

#### ② 牛の飼養動向

豪州の牛飼養頭数(乳牛を含む)の推移を中・長期的に見ると、1960年代後半から70年代半ばにかけて、世界的な牛肉需要の増大を背景に、飼養頭数は急速に増加し、1976年には過去最高の3343万頭を記録した。

その後、第二次オイルショック（1979年）などによる世界的な牛肉需要の減退や肉用牛経営の悪化、大干ばつの発生（1982年）などにより、と畜頭数が急増した。1984年には2216万頭と、ピーク時である1976年の飼養頭数に比べ3分の2まで減少した。それ以降は緩やかな増加に転じている。

図7 牛飼養頭数の長期的推移



資料：ABARES「Australian Commodity Statistics 2012」(2011年以前)、  
「Agricultural commodities – September Quarter 2013」(2012年)  
注1：乳牛を含む  
注2：各年、6月末時点

2000年以降は、干ばつの影響を受けながらも、2600万頭台から2800万頭台で推移している。

2006/07年度から2007/08年度にかけての大規模な干ばつの影響を受けた早期とうたにより、と畜頭数が増加し、2006年から2010年にかけて、牛飼養頭数は減少傾向で推移した。その後、2010年から2012年前半にかけて、東部を中心に天候に恵まれたことから、生産者はめす牛や子牛を保留し、飼養頭数の構築の拡大を図った。この結果、2011年には、約30年ぶりの最高頭数となる2850万6000頭となった（表7）。

2012年6月時点の牛飼養頭数は、前年からわずかに減少して2841万8000頭（前年同期比0.3%減）、ま

た、総飼養頭数の9割を占める肉用牛は2568万5000頭（同1.0%減）となっている。

表7 牛飼養頭数の短期的推移

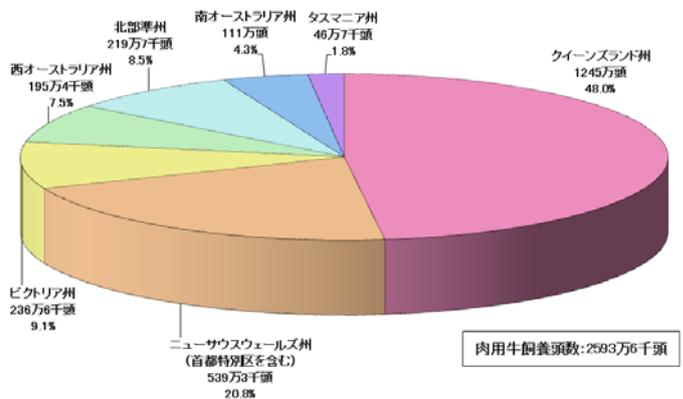
(単位：千頭)

区分/年	2008	2009	2010	2011	2012
肉用牛	24,784	25,295	24,008	25,936	25,685
乳用牛	2,537	2,612	2,542	2,570	2,733
合計	27,321	27,907	26,550	28,506	28,418

資料：ABARES「Australian Commodity Statistics 2012」(2011年以前)、  
「Agricultural commodities – September Quarter 2013」(2012年)  
注：各年6月末時点

肉用牛の飼養頭数を州別に見ると、QLD州（シェア48.0%）、NSW州（同20.8%）、VIC州（同9.1%）の東部3州で全体の8割近くを占め、豪州東部は肉用牛供給の根幹を成している（図8）。

図8 州別肉用牛飼養頭数(2011年6月末時点)



資料：ABARES「Australian Commodity Statistics 2012」

### ③ 牛肉の需給動向

#### ア 牛と畜頭数および牛肉生産量

2006/07年度、2007/08年度の干ばつは、100年に1度と言われる規模となり、肉用牛の早期出荷によると畜頭数の増加で、2006/07年度（7月～翌6月）の牛と畜頭数（子牛を含む）は908万頭となった。それ以

降は、牛群再構築に伴い右肩下がり推移し、2011/12年度のと畜頭数は787万3000頭となった。

一方、2010年以降は、天候の回復によって飼養環境が改善し、飼料となる牧草が豊富にあったことから、平均枝肉重量は増加傾向にあった。これにより、と畜頭数の減少にもかかわらず、牛肉生産量(子牛肉含む、枝肉換算)は横ばいで推移しており、2011/12年度は211万5000トンとなっている。

表8 牛肉需給の推移

(単位:千頭、千トン、キログラム)

区分/年度	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12
と畜頭数	8,680	8,583	8,364	8,097	7,873
生産量	2,132	2,125	2,109	2,133	2,115
平均枝肉重量	268.8	269.4	275.7	283.5	288.0
輸出量	930	968	899	937	948
1人当たり消費量	34.6	31.4	34.6	33.9	31.9

資料: MLA「Statistical Review」

注1: 年度は7月～翌6月

注2: 生産量および1人当たり消費量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース

注3: と畜頭数には子牛含む

注4: と生産量、輸出量および1人当たり消費量は子牛肉含む

注5: 平均枝肉重量は成牛のみ

## イ 牛肉輸出

2011/12年度の国別輸出量(船積重量ベース)は、最大の輸出先である日本向けが32万6000トン(前年度比7.1%減)、韓国向けが12万3000トン(同11.5%減)と減少した一方で、米国向けが20万5000トン(同28.1%増)と、前年度の減少から回復した(表9)。

同年度は、欧州の経済不安により、輸出市場の多くで牛肉消費の低下がみられたほか、豪ドル為替が平均1.036米ドル(前年度比3.7%高)と、対米ドルにおいて高値で推移したことで、日本や韓国の主要市場で豪州産の価格競争力が低下した。

同年度の輸出をけん引した米国向けは、米国内での減産や加工用牛肉への需要の高まりから増加した。

また、その他の輸出先では、台湾向け3万8000トン(同20.1%増)、シンガポール向け1万2000トン(同42.9%増)、香港向け9,576トン(同66.3%増)、中国向け7,736トン(同7.9%増)などが、これまでの輸出記録を更新した。

牛肉輸出量に対し、日本、米国、韓国の主要3カ国以外が占める割合は、2007/08年度には2割に満たなかったが、2011/12年度には3割を超えるなど、輸出の多角化が進んでいる。

表9 牛肉の国別輸出量の推移

(単位:トン)

国名/年度	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	輸出シェア(11/12)
日本	365	363	350	351	326	34.4%
米国	240	282	211	160	205	21.6%
韓国	146	113	124	139	123	13.0%
その他	179	210	215	287	294	31.0%
合計	930	968	900	937	948	

資料: ABARES「Agricultural commodity statistics 2012」

注1: 年度は7月～翌6月

注2: 船積重量ベース

## ウ 消費

豪州の1人当たり食肉消費量は、おおむね110キログラム前後で推移している(表10)。鶏肉の消費は、低価格や消費者の健康志向を受け、他の先進国と同様に増加する一方、牛肉消費は停滞気味にある。2011/12年度の1人当たり年間消費量は、鶏肉(44.6キログラム)が最も多く、次いで牛肉(32.8キログラム)、豚肉(26.0キログラム)、羊肉(9.8キログラム)となっている。

表10 1人当たり年間食肉消費量の推移

(単位:キログラム)

区分/年度	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12
牛肉	34.6	31.4	34.6	33.9	32.8
マトン	2.0	1.4	1.0	0.1	0.3
ラム	11.1	10.7	10.2	9.3	9.5
豚肉	24.7	24.3	26.2	25.4	26.0
鶏肉	37.8	37.5	38.0	44.0	44.6
合計	110.2	105.3	110.0	110.7	113.2

資料: MLA 「Statistical Review」

注1: 年度は7月～翌6月

注2: 牛肉には子牛肉を含む

⑤ 生体牛輸出

生体牛輸出は、1990年代中頃からインドネシア、フィリピンなど東南アジア諸国向けの肥育素牛を中心に急増した。1997年のアジア経済危機の影響により、輸出は一時的に減少したものの、その後の順調な経済復興や中東諸国など新規市場の開拓もあって、再び増加基調に転じ、2002/03年度には、100万頭を超え過去最高となった。その後、一度は減少傾向に転じたものの、2005/06年度以降は増加を続け、2009/10年度には、インドネシア向けの増加から、96万頭となった(表11)。

しかしながら、最大の輸出先であるインドネシアでは、2010年から5カ年で実施する自国の牛肉自給率向上プログラムにより、2010年に350キログラム未満の輸入体重の制限を設け、2011年以降は生体牛の輸入枠を設けた。これにより、豪州のインドネシア向けの生体牛輸出は、2010/11年度以降減少し、2011/12年度には37万6200頭(前年度比18.1%減、2009/10年度比47.6%減)となった。

※ 豪州産生体牛の輸入枠は、2011年が50万頭、2012年が28万3000頭

2011/12年度の他の輸出先を見ると、イスラエル向け6万300頭(前年度比13.0%増)、中国向け5万

8900頭(同15.5%増)、ロシア向け3万6200頭(同96.8%増)などの増加が目立っている。中国向けやロシア向けは、乳牛の輸出が大半を占めている。

表11 生体牛の国別輸出量の推移

(単位:千頭)

国名/年度	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	輸出シェア(11/12)
インドネシア	546.9	701.4	718.1	459.2	376.2	55.1%
イスラエル	59.0	27.7	36.4	53.4	60.3	8.8%
中国	6.8	16.0	53.3	50.9	58.9	8.6%
トルコ	-	-	1.2	104.4	37.4	5.5%
ロシア	-	-	9.4	18.4	36.2	5.3%
エジプト	-	-	33.4	23.1	32.1	4.7%
フィリピン	15.6	10.7	14.8	15.9	25.4	3.7%
マレーシア	26.9	23.4	5.5	20.6	20.0	2.9%
サウジアラビア	14.8	24.9	7.7	19.5	-	-
日本	20.2	17.5	15.8	12.7	14.9	2.2%
その他	132.5	93.4	72.6	28.8	21.9	3.2%
合計	769.9	891.1	957.5	806.9	683.3	

資料: MLA 「Statistical Review」

注1: 年度は7月～翌6月

注2: 乳牛を含む

⑥ 肉用牛価格の動向

2011年の家畜市場加重平均価格は、1キログラム当たり334.0豪セント(前年度比9.5%高)と過去最高水準となった(表12)。これは、2010年初頭から天候に恵まれて、牛群再構築を図る生産者が肉用牛を保留し、出荷頭数が減少したことにより、牧草肥育牛生産者やフィードロット、食肉処理加工業者間で、競合が強まったことによるものである。

表12 肉牛価格の推移(枝肉換算)

(単位:豪セント/キログラム)

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
若齢牛	324.1	333.5	319.3	349.2	386.1
肥育牛	311.8	318.8	299.4	321.5	343.3
経産牛	253.8	267.8	252.8	272.2	293.5
加重平均	287.3	297.5	281.5	304.9	334.0

資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 2012」

注1: いずれも、主要家畜市場の価格

注2: 肥育牛は生体重500~600kg、経産牛は同400~520kg